教育報告

グローバル化時代における国際教育の展望と課題
―異文化理解の授業を通して―

ヨフコバ四位エレオノラ

１．はじめに

本稿では，教養教育科目として開講されている「異文化理解」という授業での教育の試みをもとに，国際教育の展望と課題について考慮する。本稿は，平成 28 年度（2016 年度）に実施された授業を具体例にとり，その授業の分析から見えてきた国際教育の実態を報告する。

２．異文化理解と国際教育

異文化理解という概念は幅が広く様々な側面を含んでいる。簡単に言えば，異文化理解とは，自国の文化と異なる文化を理解し，尊重するということである。しかし，異文化を理解し尊重するということは具体的にどういうことであろうか，また我々が異文化を理解し尊重するためにはどのような行動をとるべきか，ということに関しては決まった答えはない。そのため，解釈も行動パターンも人によって異なる。梶田叡一（2011：11）は，国際教育の基礎は国際人を育てるということであり，その国際人を育てるということを，「それぞれの地域での風習や文化について学び，人々の暮らしを支えている価値観や宗教を理解し，その地域に伝えられている優れた美術や音楽や文学等々について認識を持つということが必要になる」と定義し，また国際人になるということに関しては，「複眼思考ができるようになることである」と述べている。また，鎌田（2011：38-39）は，国際教育の資質は，「語学力」，「共生力」，「自文化への理解」を育てることにあると指摘する。

国際教育は何を目指すべきか，そしてどのような形で行うか，ということは，その教育を行っている教育機関の実施体制やポテンシャルによるものである。本報告の対象となっている「異文化理解」という授業は，実施回数が限られているため，時間の制約が授業でできることの大きな前提となっている。それに従い，授業の狙いは次のように設定された：

①受講生のこれからの人生や職業にとって重要であろうテーマを選定し，そのテーマについて学び，また意見交換しながら自身の意見を確立する。
②クラスに外国人留学生を招き，いくつかのトピックについて留学生とディスカッションを行い，異文化を体験しながら，他文化についての知見を深める。
③他文化との比較を通し，自文化を客観的に観る判断力を養い，自文化についての知見も深める。

３．本授業の概要

「異文化理解」は，後期に開講され，15 回から構成されている科目である。2016 年度の履修者数は 90 名であった。その内訳は次の通りであった：医学部 44 名，看護学科 22 名（内 2 名が 2 年次生），薬学部 24 名。２．で指摘された授業の狙いをもとに，授業の目標は，「異文化問題，国際交流への興味と関心を持ち，異文化に関するトピックについての対話活動やインタビューなどを通して，異文化や自文化についての知見を深める」というように設定された。授業は講義形式で行われたが，各回の授業でグループディスカッションの時間が設けられ，受講生が話し合ったことの結果およびトピックについての自分の意見やコメント等をコメントシートに書き，授業終了時にコメントシートを提出するという課題が課せられた。また，4 回にわたり，キャンパスに在籍する外国人留学生（大学院生，研究生，研究員）との交流会が行われた。交流会におけるディスカッションは，基本的に日本語で行われたが，留学生が日本語で表現できないことに関しては英語使用が認められた。

授業で扱ったトピックとそのシラバスは表１の通りである。

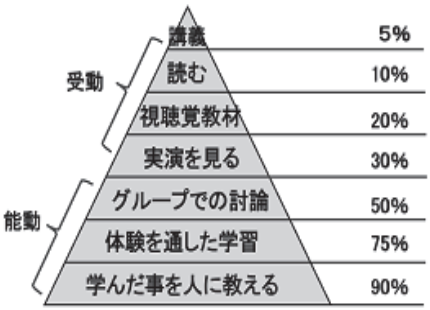
表１「異文化理解」シラバス

1	文化とは何か・文化の定義・文化の要素（特徴）
2	コミュニケーションとは何か・コミュニケーションおよび異文化間コミュニケーションのメカニズム
3	日本文化
4	異文化交流会①
5	言語と文化
6	異文化交流会②
7	非言語的コミュニケーション
8	習慣・マナーと常識／非常識
9	異文化交流会③
１０	異文化理解・異文化間コミュニケーションを阻害する原因
１１	価値観とステレオタイプ
１２	異文化交流会④
１３	異文化適応・カルチャーショック
１４	東欧の文化
１５	世界のユーモアと異文化間コミュニケーション

本授業では，アクティヴラーニングの形式の一つであるグループディスカッションが取り入れられた。本授業にアクティヴラーニングの要素が取り入れられたのは次のためである。文部科学省が定め

ている（文部科学書，平成 24 年 8 月 28 日中央教育審議会）アクティヴラーニングのコンセプトにもあるように，教員による一方向的な講義形式の教育より，「学修者が能動的に学修することによって，認知的，倫理的，社会的能力，教養，知識，経験を含めた汎用的能力の育成を図る」ことができる。特に，体験が重要な要因となっている異文化理解教育にとっては，教員による一方的な教え方より，能動的に学ぶということの方が有効的であると考えられる。また，アメリカ国立訓練研究所（National Training Laboratories）の調査の結果で設定されたいわゆるラーニングピラミッド（図１）が示しているように，アクティヴラーニングによる学習定着率は，講義による学習定着率より高い。

図１「ラーニングピラミッド」【出典：溝上慎一，2014】



本授業で特に重視されたのは，上記のピラミッドにあるグループでの討論および留学生との対話による体験を通した学習である。

４．授業開始時の受講生の認識

授業開始時には，異文化に対する受講生の認識およびニーズを調査するためにアンケートを行った。そのアンケートには複数の項目があったが，特に次の項目とその回答に着目したい。

①これまでの異文化体験
②学習してきた言語
③学習してみたい言語
④訪れてみたい国
⑤異文化理解の重要性についてどう考えるか
⑥異文化を理解するとはどんなことか
⑦留学生と話してみたいトピック

①に関しては，7 名を除いて，ほとんどの受講生は異文化体験があると答え，またその経験は主に次のようなことであった：１）海外旅行または海外短期滞在，２）学校での異文化交流会，３）学校で外国人の先生に語学を習った，４）留学生・外国人と話した，５）国内で外国人を（道）案内した。

②の学習してきた言語に関する回答は英語に集中していたが，何人かの受講生は，大学入学後に学

習し始めたフランス語やドイツ語，また中国語も例として挙げていた。一方，③の学習してみたい言語に関しては，受講生の関心の幅が広く，イタリア語，ロシア語，スペイン語，ポルトガル語，デンマーク語，モンゴル語，ギリシャ語，ベンガル語等とバラエティに富んだ言語が挙げられていた。また，それに関連し，他文化への関心の広さが窺える回答も多く，受講生が④訪れてみたい国として挙げていた国の中には，ホンジュラス，パラオ，ボリビア，ブラジル，インド，モルディヴという国があった。

⑤、⑥、⑦の質問は，本授業の内容と目的に最も関係している質問であった。⑤，⑥の回答からは授業開始前からの受講生の異文化に対する高い意識が窺えた。「異文化理解の重要性」については、全員が重要であると答えていた。その理由としては次のようなことが挙げられていた：社会のグローバル化や将来の自分の仕事への役立ち，多様な考え方や価値観を知る重要性，視野の広がり，円滑なコミュニケーションのため，自文化に対する客観的な見方のため，差別や偏見をなくすため。また，⑥「異文化を理解する」こととはどんなことかということに関しては，認め合い，偏見を持たない考え方，多数の言語や習慣を知るということが指摘されていた。

授業開始時のアンケートからは，多くの受講生が外国人留学生との交流会を望み，異文化理解の授業を履修していることがわかった。しかし，⑦留学生と話してみたいテーマについては，回答の多くがステレオタイプ的なもの（日本の善し悪し，日本のイメージ，食文化等）であった。これらのステレオタイプ的な回答は，授業の重要な課題，すなわち，意義のある交流会にするために，交流会で話し合われる内容については教員のコントロールと指導が必要であることを示してくれた。

５．受講生の気づきと授業の成果

ここでは，留学生との異文化交流会およびコースの後半に行われた「異文化理解を阻害する原因」，「異文化適応」という授業に焦点を当て，受講生の気づきと授業の成果についてまとめる。

留学生との交流会は 4 回にわたり行われた。それぞれの交流会のトピックは「日本・日本文化」，「コミュニケーション（言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーション）」，「習慣とマナー」，「価値観」であった。各回の交流会の前に，同じトピックについて教員の講義によるブレインストーミングが行われた。また，留学生と話し合うトピックの主な項目（日本語と英訳）のタスクシートは，教員が作成し，事前に受講生と留学生に配布した。受講生には，それ以外に，話し合いで分かったこととそれに対する意見をまとめるコメントシートも渡した。コメントシートは，回収し評価の対象とした。

異文化交流会に参加した外国人留学生の国籍は，中国，モンゴル，インドネシア，ネパール，バングラデシュ，エジプト，ベラルーシ，カナダ，ハンガリーであった。

５．１．異文化交流会

１回目の異文化交流会のテーマは「日本と日本文化」であった。この交流会の狙いは，他国の人が日本と日本文化をどう考えているかを知り，また受講生が自国や自文化について持っているイメージ

と外国人が日本と日本文化について持っているイメージを比較し，違いを意識しながら，日本と日本文化を客観的に観るということであった。交流会が行われる前の授業では，受講生に自分の文化の特徴について聞き，コメントを書いてもらった。受講生が指摘した日本文化の特徴は，「協調性を重んじる」，「自己主張をあまりしまい」，「集団主義」，「礼儀を大切にする」，「宗教に縛られない」，「繊細」，「曖昧ではっきりしない」，「おもてなし精神」，「排他的」ということであった。

交流会で話し合われるトピックの具体的な項目は教員が定めたが，教員が定めた項目以外に，受講生が自由な質問をするという設定もなされた。交流会で話し合われた内容は具体的に次のようなことであった：①留学生が日本または富山大学を留学先に選んだ理由，②留学生が日本での生活において良いと感じていることと大変だと感じていること，③留学生の国・文化と日本・日本文化の違い，④留学生の国の人が持っている日本（人）のイメージ，⑤留学生が日本に来て変わったこと，⑥留学生が日本人に（日本で）学んだこと，⑦留学生が日本でやってみたいこと。交流会はグループで行われ，留学生が複数のグループを回り，同じトピックについてディスカッションを行った。

ここでは，③，④，⑥に関する結果および受講生のコメントを中心に考察したい。

③と④に関しては，同じ回答が含まれていたため，まとめて考察する。留学生がポジティヴなイメージとして指摘したのは，「真面目」，「勤勉」，「親切」，「正直」，「時間に正確」，「自制心がある」ということであり，また国との主な違いとしては，「治安がよい」，「サービスがよい」ということであった。一方では，ほとんどの留学生は，受講生が自らの文化の特徴として指摘していた「自己主張をしない」ということをネガティヴな側面を持つ特徴として指摘し，日本人が自分の考えや思いを主張せずに黙っているということを「積極性に欠けている」こととして解釈していた。

一方、⑥に関しては，留学生は，主に「時間を守ること」と「個々を尊重すること」を挙げていた。

１回目の交流会の受講生のコメントからは，受講生がこの交流会を通して多くのことを学び、様々な気づきがあったことがわかった。受講生の気づきには次のようなことがあった：

・日本人の「物静かな態度」が消極的なイメージを与えていることに驚きを感じた。
・自分の意見をしっかり述べて積極的にコミュニケーションをとっていくことの大切さを実感した。
・日本で暮らしていれば実感がなく，あまり気づかないようなことや新発見がたくさんあった。
・他国の人とのコミュニケーションによって同じ空間で一緒に過ごすグローバルな時がすてきだと感じた。
・日本文化についていろいろと気づかされた。また，比較を通して日本文化を客観的に観ることができた。
・固定概念について考えさせられた。
・今まで自分が異文化に対していかに無関心だったか実感させられた。
・これから留学したり外国へ行ってみたいと思うようになった。
・日本から離れてみないと「日本らしさ」がわからないことがわかった。

２回目の交流会のトピックは「コミュニケーション」であったが，この交流会では言語的コミュニケーションだけでなく非言語的コミュニケーションの特徴についてもディスカッションが行われた。

時間に制約があったため，教員による事前のブレインストーミングは，言語的コミュニケーションのみについて行われた。この交流会の目的は，普段接することのない言語に触れることと，日本語の本質や特徴について客観的に考え，意識することであった。また，もう一つは，文化による非言語的コミュニケーションの違いを知り，非言語的コミュニケーションの違いが誤解やミスコミュニケーションを招き兼ねない原因になり得るということを認識することであった。

本交流会からの受講生の気づきは他言語との類似に集中していた。より厳密に言えば，多くの受講生は，日本語とモンゴル語，また日本語とハンガリー語が類似を持っていることに驚いていた。事前の教員の講義によるブレインストーミングでは，言語の親族関係や系統について紹介されていたが，受講生が講義で聞いた内容より留学生との話しで分かったことの学習定着の方が高いことが判明した。このことから，アクティヴラーニングの有効性が立証された。

２回目の交流会では，日本語についても多くの発見があった。交流会の前に行われた日本語に関する意識調査では，受講生が日本語の特徴または非母語話者にとって習得困難な日本語の側面として指摘していたのは，主に漢字と敬語であったが，留学生へのインタビューを通して，それまでに気づいていなかった日本語の特徴，すなわち擬態語や数量詞（ものの数え方），日本語の曖昧さという特徴に気づかされた。そして，受講生は，本交流会の言語的コミュニケーションの話し合いから学んだことについては，母語話者が何気なく使っている母語のある特徴が，非母語話者にとっては以外と難しいが，母語話者がそれにあまり気づくことがないというコメントを残していた。

また，非言語的コミュニケーションについてのディスカッションを通しては，受講生は，普段ほとんど意識することがないこのタイプのコミュニケーションの大切さに気づかされた。特に，受講生にとって大きな発見だったのは，異文化における発話者同士の距離感覚やサインランゲージにおけるサインが表す意味の違いであった。非言語的コミュニケーションの大切さに気づかされた受講生は，自分の国では特に大きな意味のないことであっても他国においては絶対に禁じられていたり失礼に当たることがあったりし，何気ない身振りがトラブルを招くことがあることを意識したというコメントを残していた。さらに，日本人のコミュニケーションパターンでは，非言語的コミュニケーションで補われる部分が多々あるが，他言語でのコミュニケーションではそれに明示的な言語的表現が使われることが多いという気づきもあった。本交流会から得られた成果に関して，受講生は，異文化を持つ他者と意志疎通をするためには、お互いの言語だけでなく，その文化の背景を理解しようとする姿勢が必要であると感じたと記していた。

３回目の交流会では，留学生はパワーポイントを使い，自国および自国の習慣やマナーについて発表を行った。発表では，英語の使用も認められた。この交流会のためには，受講生には２つの課題が課せられていた。一つは，留学生の発表を聞き，他文化の特徴や習慣・マナーについてわかったことをまとめ，日本との違いについてコメントを書くということであった。さらにもう一つは，授業に臨む前に，発表を行う留学生の国について調べ，関心または疑問のあることについて，留学生の発表を聞いた後，質問をするということであった。

留学生の発表で受講生が興味を示し，コメントを残した他文化の習慣や特徴を表２に示した。

表２「他文化の習慣や特徴」

国／文化	習慣・特徴
インドネシア	高齢者を大切にすること；宗教による挨拶の仕方に制約があること
バングラデシュ	年中行事や結婚観
エジプト	ラマダンと食文化
ハンガリー	クリスマスの過ごし方
中国	食文化や食事のマナー
モンゴル	祭りや子供の遊び

二つ目の課題に関しては，全員は事前に調べ，調べたことについて短いレポートを書いたが，留学生には質問はしなかった。質問をしなかった理由はコース終了時の授業評価アンケートから明らかとなった。その理由は次の２つであった。一つは，全員の前で質問をするのが恥ずかしくて，質問はしたくてもできなかったということであった。もう一つは，英語で話していた留学生に対し英語で質問をする自信がなく,遠慮し質問をしなかったということであった。受講生のこれらのコメントからは，本授業の二つの問題点，すなわち授業形式及び英語使用の問題点が浮き彫りとなった。

最後の交流会のテーマは価値観とステレオタイプであった。交流会の前に，受講生には受講生が考えている日本文化の価値観やステレオタイプについてアンケート調査を行った。交流会では，留学生に自文化の価値観と，自国の人々が持っている日本に対するステレオタイプ的なイメージを紹介してもらった。２つの授業から「価値観とステレオタイプ」について分かったことを表３に示した。

表３「価値観とステレオタイプ」

日本人が考える日本人の価値観とステレオタイプ的なイメージ	外国人が考える日本人のステレオタイプ的なイメージ	外国人が考える自国の文化の価値観
協調性	勤勉（モンゴル，エジプト，カナダ）	（モンゴル）自国の文化の継承
上下関係	お辞儀をよくする（モンゴル）	（エジプト）家族を大切にする
男尊女卑	怖い映画が好き（モンゴル）	（中国）親孝行
仲間意識（集団主義）	真面目（モンゴル）	（インドネシア）近所づきあいを大切にする
時間厳守	落とし物が出てくる（インドネシア）	（カナダ）いろいろな文化を受け入れる
年功序列	他人を気遣う（カナダ）	
恥	相づちをよく打つ（中国）	

本交流会をより有意義なものとするためには，交流会が行われる前に，受講生にも，日本人が留学

生の国や文化に対して持っているステレオタイプ的なイメージについてアンケート調査を行うべきであったが，最後の交流会にはどの国の留学生が参加できるかということが交流会直前まで決まらず，事前の調査やブレインストーミングが困難となった。この問題を教員側の反省点と意識し，今後の課題にしたい。

５．２．異文化理解と異文化適応

最後に，「異文化理解の阻害原因」，「異文化適応」という授業で扱われたトピックに関する受講生のコメントを通し，受講生の異文化に対する認識を考察したい。

八島と久保田（2012）は，異文化理解及び異文化間コミュニケーションを阻害する要因として１）「皆と同じ」という前提，２）ステレオタイプ，３）偏見，４）エスノセントリズム，５）評価的な態度と極度の不安，６）言語・非言語解釈の違い，７）暗示的なコミュニケーション，８）差別的なまなざしを挙げている。専門家によって指摘されるこれらの要因を，受講生がコースを通し感じたことの結果として指摘した原因と比較し，受講生の異文化理解に対する意識を確認したい。

異文化理解の阻害原因として受講生がもっとも多く挙げたのは，「言語の違い」であった。この指摘には，本コースを通して受講生が自らの語学力について認識したことが反映されているようにも思える。次に回答が多かったのは，「偏見やステレオタイプ的な考え方」であった。また「偏見やステレオタイプ的な考え方」と並び，多くの受講生が指摘したのは「文化・習慣・価値観の違い」であった。そのほかに，「宗教の違い」や「知識のなさ」も挙げられていた。これらの回答からは，受講生の異文化理解問題への真剣なまなざしが窺える。

コースのおわりに実施された「異文化適応」の授業では，受講生に表４にある異文化感受の６段階（Bennett, 1986）を提示し，自分が今どの段階にいるか，についてアンケート調査を行った。受講生の回答の結果は次の通りとなった。

表４「異文化感受」

１無知から認識できない	1
２偏見	1
３表層的な相違を受容する	55
４全面的な相違を受容する	5
５異文化の人と効果的にコミュニケーションできる	0
６複数の文化を自己の中にうまく統合できる	0

受講生の回答はレベル３に集中した。このことから，受講生のある種の「用心深さ」（つまり，アンケートを受ける者としての，アンケートの中のより中立的な項目を選ぶ一般的な心理）も感じられるとは言えるものの，大部分の受講生が自文化と異文化の違いに気づき，自分とは違う価値観をもつ文化に対し理解を示し始めているとも言える。残念なことに，１と２をそれぞれ選んだ１名ずつもいたが，こ

のような回答があったことを教員側の反省点としても受け止め,授業を通して伝えるべきことを改めて考えるためのきっかけとなった。一方では,うれしいことに,異文化を全面的に受け入れる立場にある何名かの受講生もいた。このような結果は教員の励みとなった。

６．おわりに

本稿は,「異文化理解」という授業を通し，国際教育の展望と問題点について考察するということを目的にした。学期末に実施された授業評価アンケートの結果が示したように，本授業に対する受講生の満足度が高く（全体の満足度は部局平均４％と同じく４％であった。その内訳は，３２％が満足，３９％がやや満足，２７％が中立，２％がやや不満であった)，また，本コースのはじめに設定された目標が達成され、授業は一定の成功を収めたと言える。

本コースを終え,「異文化理解」という授業から見えてきた国際教育の可能性については次のように言える。

本授業の試みとして，4 回にわたり交流会が行われ，受講生が留学生との対話を通し,「生」の異文化に触れ，講義だけでは感じられない他文化の事情を知ることができた。

また，授業にはアクティヴラーニングの形式であるグループディスカッションが取り入れられ，それによって，受講生が教員から一方的に与えられる情報を鵜呑みにするのではなく，自らの力で異文化の様々なトピックについて考え，他の受講生と意見交換しながら，自分の意見を確立することができた。

一方では，いくつかの問題点も見えてきた。一つはクラスの人数である。「異文化理解」という授業が教養科目の一つであるため，クラスが大きくなることがやむを得ない事情ではあるが，大人数のクラスは，次の理由のため，本授業の交流活動には適しない。その理由とは，留学生の手配の問題である。杉谷キャンパスに在籍している外国人留学生がさほど多くないので、毎回の交流会に一定人数の留学生を確保することが難しく，受講生と留学生の数にはアンバランスが生じ，一人の留学生が対応しなければならない日本人のグループが１５名を超える場合もあった。そのため，受講生の一部が積極的に話し合いに参加できないことが起きてしまっていた。

さらなる問題点は教室の問題であった。これに関しては，受講生の期末の授業評価アンケートにも指摘されていたが，授業に割り当てられていた教室は，机が動かせず，本授業の活動には適しなかった。

最後に，受講生と留学生が使用していた共通言語の問題が指摘できる。話し合いでは，英語を使用していた留学生もいたので，受講生の一部にとっては英語が大きな壁となり，言われていたことを十分に理解できなかったり，また英語で質問する自信がなかったりして，交流に積極的に参加できなかったこともある。

今後は，これらの問題点を再検討し，改善を図る必要がある。

授業評価アンケートとは別に，コースの最終回に独自のアンケートも行い，授業で実施された活動および取り上げられたトピックで受講生が最も興味をもったことについて質問をした。活動に関して

は，留学生との交流会が第一位であった。また 4 回行われた交流会の中，受講生が最も興味を示したのは「外国の習慣とマナー」というセッションであった。一方，授業で取り上げられたテーマに関しては，受講生が最も関心を示したのは「世界のユーモア」というテーマであった。さらに，今回のコースでは扱わなかったが，取り上げてほしかったテーマに関しては，外国の歴史，スポーツ，建築というテーマが挙げられていた。

本稿で「異文化理解」という授業をもとに，国際教育について考察してみた。本稿の分析からも明らかとなったように，授業の構成や内容，また実施方法をめぐりまだ課題が残っている。今後は，これらの課題の解決策を求め，授業の改善に努めたい。

参考文献

Bennett, M. J., 1986. A developmental approach to training for intercultural sensitivity. *International Journal of Intercultural Relations,* 10, 179－196.

『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）』平成 24 年 8 月 28 日中央教育審議会，文部科学省 HP。

梶田叡一「国際教育の主要課題は何か」，梶田叡一責任編集『国際教育の課題と展望』金子書房，2011 年，9-14.

鎌田首治朗「国際教育の必要性と日本語教育の重要性」，梶田叡一責任編集『国際教育の課題と展望』金子書房，2011 年，38-48。

八島智子，久保田真弓『異文化コミュニケーション論』松柏社，2012 年。

溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂，2014 年.

［ヨフコバ四位　エレオノラ］

［富山大学医学部（教養：日本語日本事情）］